

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔二〕の 1 から 13 までとする。

いつたい、アウシュヴィッツで何人が殺されたのでしょうか。第二次世界大戦後にナチス・ドイツの戦犯を裁いたニュルンベルク裁判では四〇〇万人とされました。さすがにそれは多すぎるのではないか。現在では公称一五〇万人かと思います。それでも多すぎるという意見もありましょうが、歴史にもまれな大量殺人が行われたことは事実でしょう。

アウシュヴィッツはこれだけの歴史を背負っているのです。その事実はいま世界の歴史に刻まれてしまった。

歴史は事実の集積であり、経験であり、記録です。記録は焼却できるかもしれない。経験も経験者が死に絶えれば^(a)シウメツするかもしれない。記録も経験もなくなってしまうえば、事実もないも同然になるかもしれない。

いや、経験は忘れることもできる。昨日、一〇〇万人殺しても、忘れることはできる。人間はいやなことは特に忘れたがります。忘れることに失敗するとトラウマになりますが、逆に言う、いやなことがみんなトラウマになるわけではありません。忘れ損ねたことがトラウマになるのです。

※ アドルノは忘れないタイプの人です。歴史の側に立ちます。だから「アウシュヴィッツ以後、詩作は野蛮である」^①のです。

なぜ詩作なのか。アウシュヴィッツの犯罪の主体を考えねばなりません。それはアドルノを含むドイツ人なのです。ヒトラーやナチスだけの責任には還元しきれない。ワイマール共和国の民主主義的な制度を使って、選挙にそれなりに勝って、しかもそのときから排外主義をはっきり掲げていたナチスなのです。それを許したドイツ人全般が免罪されるとは虫のよい考え方でしょう。

そして、ドイツとは詩の国、音楽の国と称されてきました。ヨーロッパの近代化の流れにおいては、イギリスやフランスに後れを取ったけれど、何しろドイツは大詩人、ゲーテを生み出した。もちろんベートーヴェンもいる。ヨーロッパの文化の華。それが近代ドイツのひとつのイメージでした。

そのドイツ人でも、貧すれば鈍したのです。世界大恐慌に巻き込まれれば、ヒトラーを選んでしまう。第一次世界大戦の敗

北と、世界大恐慌と、優れているはずのドイツ人がこんな惨めな思いをしているのはおかしいという歪んだ自負心。まさにドイツの歴史からアウシュヴィッツという歴史的事実が生まれた。

このアウシュヴィッツという事態を噛みしめて忘れないでいれば、それ以前のように屈託なく美や理想をドイツ人が歌いあげられるはずはない。アドルノの言う「野蛮な詩作」とはおそらくあらゆる詩作ではないでしょう。人間が真善美に生きられるという天真爛漫な確信に支えられた、理想主義的な詩作のことでしょう。

もちろん、ここで言う「詩作」を詩人の仕事に限って考えてもあまり意味はないでしょう。それは文化芸術全般の創造活動のシヨウチヨウ^⑥でしょう。小説も絵画も音楽も演劇も、もはや能天気ではいられない。アウシュヴィッツの事実を忘れないでいるならば。

詩の国、音楽の国のドイツ人でも、貧すればそういう選択をしてしまうのだ。とすれば、これはもう主語はドイツ人ばかりである必要もない。文明人や文化人と自称するすべての世界の人間が、条件次第ではアウシュヴィッツを繰り返しかねない。そういうことです。似たようなまねはいつでも起こりうるということです。だから反芻していなくてはならない。

アウシュヴィッツを反芻しない能天気な文化芸術上の創作は、自らが野蛮人になりうるおそろしさを忘却し、うぬぼれているのだから、それはもう「野蛮人の証明」である。

野蛮人でない人間とはアウシュヴィッツを忘れない人間です。つまり重い荷物をいつも背負い続けるということです。そういうつもりでいたら、素直に美しい詩なんて書いていられないでしょう。屈託がにじむ。それが大事なのです。それが歴史を背負うことです。

一方、野蛮人とは

7

です。重い荷物を放り出して、すぐ解放されたと思って、過ぎ去ったことを忘れるのが野蛮人なのです。野蛮人とは歴史を忘れる人のことでしょう。特に意図的にわざと忘れる人は性質の悪い野蛮人と呼べるでしょう。

②そのときの歴史とはアウシュヴィッツである必要はありません。世界大恐慌でも満州事変でも高度経済成長でも「ベルリンの壁崩壊」でも「バブル景気」でもなんでもよい。楽しい思いも辛い思いも、よく覚えておればこそ。トラウマになったらト

ラウマに耐えてこそ。そうしてこそ人間は野蛮人から抜け出せるのです。

背負っているものが重ければ、そこから何を思っで発言するにせよ、その言葉は一定の重みを持ちます。

「ポツダム体制」の打破を主張しながら、「ポツダム宣言」を読んでいない政治家がいるとしたら、その人の言葉はとても軽いでしょ。いや、そもそも「ポツダム体制」の打破を言うのに「ポツダム体制」を作り上げた「ポツダム宣言」を知らないとなったら、打破する中身も分からないことになりますから、「ポツダム体制」打破を叫ぶ政治家が、仮に「ポツダム宣言」を読んでいなかったとしても、それをカミング・アウトすることはありえません。その政治家が野蛮人でないとしたらの話ですが。それでも正直に告白するとなれば、その政治家は正直な野蛮人なのでしょう。

アドルノの箴言しんげんを出して、アウシュヴィッツを例にしたのは極端すぎたかもしれません。しかし、歴史を背負うか否かが、野蛮か野蛮でないかの分かれ目だということが、歴史を考えたときの大前提だと思うのです。その意味で、アドルノの言葉ほど、われわれの生にとって歴史とは何かを問う言葉はないように思われます。

とにかく歴史を意識し続けることがわれわれを野蛮から救うおそろく唯一の道なのです。正の歴史にせよ、負の歴史にせよ、成功の歴史にせよ、失敗の歴史にせよ、われわれはみんな背負い続けてゆくべきだと思います。それが教養としての歴史を身につけた人間の生き方というものです。

そんなのはたいへんだ！ なんでも背負っていたら重くなりすぎてしまう。そう心配なさる向きもあるかもしれない。その通りです。

かといって地面にめりこんで沈没するとは限りません。重荷に耐えて、なおも動けるように自らを鍛錬すればいいのです。歴史的思考の鍛錬です。たくさんのかかってくる歴史をこなし、操り、飼いならし、役立てるための鍛錬です。それができれば、たとえばアウシュヴィッツの後でもいくらでも詩は書けます。底抜けに楽しい詩は書きにくくても、ガンチック©のあるピターな詩ならアウシュヴィッツ以後ほど書きどきの時代はないでしょう。

わが身で受け止められる歴史の積載荷重を大きくしてゆくしかない。それを背負ってなおも自由に動き回れるくらいに自分

の馬力を高めなくてはならない。加速度的な変化にさらされ続け、次から次へと大きな歴史的体験を背負い込む、近代以後に生きるわれわれの宿命です。

歴史とはおんぶお化けみたいなものです。背中に付いて離れないのです。しかし、だんだん重くなるという点では、おんぶお化けよりも子泣き爺こそ歴史かもしれません。

子泣き爺は幼児のように泣くのだけれども、爺である。爺というのは歴史です。昔からずっと折り重なってネンリン^dを重ねているから歴史は老人の姿をとるのでしょう。

しかもどんどん重くなるのが子泣き爺です。老人なのに重いというのは子泣き爺が歴史や時間を表す妖怪だからではないでしょうか。でも赤ちゃんである。歴史を参照することで、われわれはほんとうに新しい世界に行けるのです。なぜなら歴史を知らない、既に前にあったことを新しいと思ってしまうからです。新しさはお手輕に溢れ出てきます。野蛮人の世界では。

それから子泣き爺が泣くのはアラームではないでしょうか。歴史とはアラームなのです。歴史は繰り返すというのはウソと言えばウソですが、そういうときはこういうふうに展開するといった類似例の宝庫ではありません。

歴史を知っても先が見通せるわけではない。そっくりそのまま繰り返すということはありえない。なぜなら、この世に登場人物とそれを取りまく諸条件がまったく一緒になることはありえないからです。その意味で歴史的現象は唯一です。アウシュヴィッツはアウシュヴィッツだけです。

でも似たことは起きる。その似たこととは歴史的ジュンジョ^eの中で把握されねばなりません。強制収容所で大勢が死んだといういちばんのトピックだけを切り出して、こんなことは二度と人類が起こしてはなりません、という程度の話をするのが、アウシュヴィッツのアラームを聴いていることになるでしょうか。

昨日まで優しかったドイツの人々が、貧すれば手のひらを返して、自分たちの苦境の原因を、深く分析しようとせず、手近に存在する「社会の異物」に求める。その結果、排他主義がどこまで行くか。また、極限状態に追い詰められながら、それでも人をもっとと安く使おうとしたら、どんな悪魔の知恵が浮かぶのか。

そんなパターンで考えれば、今日の世界にはアウシュヴィッツのアラームがいくらでも鳴っている。^④ 一五〇万人か四〇〇万人殺すばかりがアウシュヴィッツではないのです。

歴史を学ぶとは、もちろん歴史的事実を知ることですが、それ以上に筋道を学ぶことであり、筋道をどう見つけるかは、ものの見方の問題になります。

即物的事実だけを屹立させて、これが歴史だと叫んでみても、それは決定的瞬間の A だけを眺めているようなもので、前後の経過を B のようにずっと見なくては歴史を学ぶことにはなりません。決定的瞬間だけを意識していても、なぜそのような瞬間が訪れたかというストーリーに思いを致さなかったら、また似たような決定的瞬間が来てからはじめて気づくということにもなりかねません。それが素晴らしい決定的瞬間ならよいのですが、破局的な瞬間だったら泣くに泣けないでしょう。

そういうときに「想定外」という決まり文句を人は口にします。が、想定外とは想像力の甘さの言い換え表現にすぎず、想像力の甘さは、歴史的事象を筋道の中でとらえる訓練の欠如からもたらされるのです。歴史に学んでいれば回避できたかもしれない、似たような悲劇を繰り返してしまうのは、やはり褒められたことではないし、頭のよい人のやることでもないでしょう。

ですから、似たような悪い出来事の二度目以降の繰り返しは、もはや悲劇とは呼べない。^⑤ 二度目は喜劇なのです。

（片山杜秀『歴史という教養』による。ただし、見出しを省略した）

※アドルノ……ドイツの哲学者・社会学者・美学者・作曲家。ナチス勢力が伸長した1930年代にイギリス、アメリカに亡命。著

書『プリズメン——文化批判と社会』で「アウシュヴィッツ以後、詩作は野蛮である」と主張した

問一 二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1 ① ショウゲキを受ける 2 ストレスをカイショウする

3 ショウキンを獲得する 4 病気のショウジョウが出る

2 ② 中国の古代オウチヨウ 2 世論チヨウサが行われる

3 景気悪化のゼンチヨウ 4 チヨウヘイされて軍隊に入る

3 ③ チクイチ報告する 2 チクバの友

3 チョチクを取り崩す 4 チクサン業の従事者

4 ④ 1 学術書のリンドクを行う 2 リンジの電車が運行する

3 リンリの授業を受ける 4 キンリンの住民

5 ⑤ 1 試合のジヨバン 2 遭難者をキュウジヨする

3 ジョコウ運転する 4 トツジヨとして姿を現わす

問二 傍線部①はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6 1 詩作をはじめとする全ての創作行為は、アウシュヴィッツという歴史的事実のトラウマを喚起させるということ

2 文化芸術上の創作は、アウシュヴィッツという歴史的事実の重さを意識しながら行われる必要があるということ

3 アウシュヴィッツ以降の世界において、詩作などという能天気な行為はドイツ人に限らず許されないということ

4 近代ドイツは詩の国だったにもかかわらず、アウシュヴィッツでの大量殺人という野蛮な行為をしたということ

問三 空欄 7 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7
1 楽をしたがる人

2 詩を書ける人

3 アウシュヴィッツの加害者

4 アウシュヴィッツを知らない人

問四 傍線部②はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

1 何らかの歴史的事実を忘れずその重みを背負うことが出来ていればよいので、必ずしもアウシュヴィッツを記憶する必要はないということ

2 仮にアウシュヴィッツを記憶したくない場合、代わりに他の重要な歴史的事実を必ず記憶し、その重みを背負わなければならないということ

3 アドルフの箴言を出してアウシュヴィッツを例に考えるのはやや極端な方法なので、他の多様な歴史的事実にも目を向けるべきということ

4 アウシュヴィッツだけに限らず、我々は他の様々な歴史的事実をも忘却せず、その重みを背負うことで野蛮から抜け出すべきだということ

問五 傍線部③の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 歴史を学ばない者は、過去にあった古い出来事の中からも現代に通じる「新しさ」を安易に見つけ出そうとする
- 2 歴史を学ばない者は、過去に人類が犯した過ちと類似の事柄を「新しい」と誤認したまま繰り返し返すおそれがある
- 3 歴史を学ばない者は、過去を知らないが故に本物の「新しさ」と偽物の「新しさ」を峻別することができない
- 4 歴史を学ばない者は、過去に何が「新しい」と見做されてきたか知らないのです、「新しさ」に対する理解が浅い

問六 傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

- 1 アウシュヴィッツでは強制労働などの国家犯罪も行われたので、記憶すべき教訓は大量殺人だけではないということ
- 2 アウシュヴィッツについて記憶されるべきは大量殺人という結果だけではなく、その背景や過程も重要だということ
- 3 アウシュヴィッツでは一五〇万人から四〇〇万人という推定よりも多くの犠牲者が出ていた可能性があるということ
- 4 アウシュヴィッツ後も国家による殺人は起きたので、アウシュヴィッツの犠牲者以外にも心を寄せるべきということ

問七 空欄 A と B に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

11

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| 1 | A | 写真 | B | 映画 |
| 2 | A | 報告 | B | 物語 |
| 3 | A | 結果 | B | 根拠 |
| 4 | A | 点 | B | 面 |

問八 傍線部⑤はどうか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 悪い事態に何度も遭遇する状況は、当事者にとって悲劇でも第三者から見れば喜劇にしか映らないということ
- 2 たとえ一度目は悲劇に感じられた出来事でも、二度目ともなると慣れていて滑稽にしか感じないということ
- 3 想像力不足のせいで悪い出来事に二度出くわす絵面は、演劇の種類としては喜劇の一場面に近いということ
- 4 類似の悪い出来事に複数回遭遇するのは、想像力が甘く歴史に学ばなかった愚か者のたどる末路だということ

問九 本文の主張と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 我々が歴史的事実と向き合わない場合、今後アウシュヴィッツの大量殺人と全く同じ出来事が起きる可能性もある
- 2 アウシュヴィッツで大量殺人が起きた背景には詩や音楽の文化が貧困であった近代ドイツの歴史も関係している
- 3 アウシュヴィッツのような悪い出来事のみならず良い出来事も含めて我々は全ての歴史を背負い続けるべきである
- 4 アウシュヴィッツ以降を生きる人類は、文化芸術上の創作をする場合も屈託ある野蛮な作品しか作れなくなった

〔二〕 次のA、Bの文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔二〕の 1 から 8 までとする。

A 客・亭主、互^{たがい}の心もち、いかやうに得心してしかるべきやと問^と。易[※]の云はく、いかにも互の心になふがよし。しかれどもかないたがるはあしし。得道の客・亭主なれば、をのづからこころよきものなり。未^②煉^①の人互に心になはうとのみすれば、一方、道にちがへばともどもにあやまちするなり。さればこそ、かなふはよし、かないたがるはあしし。

B 或人、炉と風炉[※]、夏・冬茶湯の心持、極意^{うげたまわり}を承^{うけたまわり}たきと宗易に問れしに、易こたへに、夏はいかにも涼しきやうに、冬はいかにもあたたかなるやうに、炭は湯のわくやうに、茶は服^④のよきやうに、これにて秘事はすみ候由申されしに、問人^⑤不興して、それは誰も合点の前にて候といはれければ、また易の云はく、さあらば、右の心になふやうにして御覽ぜよ。宗易客にまいり御弟子になる 6 と申されける。同座に笑嶺和尚[※]御座ありしが、宗易の申されやう至極せり。かの諸惡莫作[※]・諸善奉行と鳥窠[※]のこたへられたる同然ぞとのたまひしなり。

(A、Bとも『利休聞き書き「南方録 覚書」』による)

※易……千利休のこと。法名を千宗易。Bの本文中「宗易」も同じ

※風炉……茶道においてお湯を沸かすために使用される道具

※笑嶺和尚……笑嶺宗訴^{そうさん}。臨済宗大徳寺第百七世

※諸惡莫作・諸善奉行……諸々の悪いことをしてはいけない、善いことをしなさい。著名な詩人白樂天(白居易)が、仏教の大法に

ついて尋ねたときに、あとの鳥窠禪師が答えた言葉

※鳥窠……鳥窠禪師(道林)。中国・唐代の禪僧

問一 傍線部①はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

- 1 茶会における客と亭主とは、立場的に平等ではないから
- 2 片方が本道から外れたら、両方ともが誤ってしまうから
- 3 お互いの心持ちを忖度しあい、本音を語れなくなるから
- 4 自然に心が通い合わなければ、営みが人為的になるから

問二 傍線部②の意味として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

- 1 未熟な人
- 2 未練がましい人
- 3 未経験の人
- 4 お互いに未知の人

問三 傍線部③が指す内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 茶の湯に通じていない者同士では、心を通わせあうことができないということ
- 2 客と亭主の関係を心得ていない者は、相手の心持ちを想像できないということ
- 3 茶会の場そのものが、客と亭主の立場へと人を振り分けてしまうということ
- 4 茶の湯の奥義に達しているか否かで、心地よい状態を導けるかが決まるということ

問四 傍線部④の現代語訳として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 客の服に合うように
- 2 飲み加減のよいように
- 3 季節の気温を考えに入れて
- 4 茶会の雰囲気こそぐうように

問五 傍線部⑤とあるが、尋ねた人が不機嫌になったのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 利休の答えが、あまりにも当然の内容で凡庸だったから
- 2 利休の答えが、質問を煙に巻くように抽象的だったから
- 3 利休の答えが、他人の受け売りで独自の主張でなかったから
- 4 利休の答えが、こちらをあしらうようにおざなりだったから

問六 空欄

6

に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 まじ
- 2 らむ
- 3 べし
- 4 めり

問七 傍線部⑥の現代語訳として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 ありがたい教訓である
- 2 もっともなことである
- 3 究極の選択である
- 4 不可能の極みである

問八 傍線部⑦について、どのような意味で「同然」と言ったのか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 茶道と仏教とはもともと同一の経典から派生した
- 2 世捨て人同士の考えることは、どこかで共鳴する
- 3 幼い子供でも理解できる簡単なことが最も難しい
- 4 日本と中国とを問わず、道の極みは普遍的である

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

ハーマン・メルヴィルの『白鯨』（一八五一年）にもしろい箇所があります。

コレラの流行時には、[※]樟脳を染みこませたハンカチを口に当てて出歩く人がいる。それと同様に、スタツプの煙草は、あらゆる人生の苦難にたいして一種の消毒剤の作用を果たしていたのかもしれない。

「樟脳を染みこませたハンカチ」がコレラにたいして「一種の消毒剤の作用を果たす」——『白鯨』の同時代人たちは、いったいどのようにして、こうした（少なくともわれわれにとっては）不可思議な思いこみをもつにいたったのでしょうか。じつはその思いこみの背後には、それより一世紀ほどまえに起こったひとつの感性上の出来事が存在しているのです。それは、社会的視点を特徴とするアナール学派を代表するフランスの歴史学者アラン・コルバンが『における①の歴史』（原題『瘴氣と黄水仙』^{きすいせん}）において「嗅覚革命」と名づけたものです。

コルバンによれば、一八世紀の後半、悪臭にたいするそれまでの鷹揚な態度が、不寛容な態度へと急激に変わります。「現在の私たち〔が〕、自分が生きている無臭の生活環境を脅かすもの一切にたいしてきわめて不寛容になってしまっている」という事実も、じつはその端緒をこの深い感性の変容にこそ求めることができる——そう彼は述べます。とすれば、どうしてそのような感性の変容が起こったのか。

一七五〇年頃、「ジョン・プリングルと『デイヴィッド・マクブライド』の行なった腐敗物質にかんする研究によって、いわゆる気体化学なるものが台頭しはじめ、都市病理学らしきものが現われてきて、そこから、これまでにない不安感がかきたてられてきた。糞便、泥、便槽、死体といったものが、激しい恐怖の念をよびさましたのである。社会階層の

ピラミッドの頂点から底辺にむかって、恐怖感が伝わってゆき、臭気をしりぞけようとする動きがにわかに激しくなった。腐敗がほうほうに広まるのを防ぎ、むかつくような腐敗の脅威からのがれるために瘴気のありかを探知する責務を、ほかならぬ

3

が担わされたのである。

「空気を四大の一つとか、ある種の化合物と考えるのではなく、いくつかのガスの混合物と見なす観点があらわれ」、空気を構成するいくつかのガスの組成を定義していくうちに、「空気はもはや生命力の創造や成熟の場としてではなく、腐敗の実験室として研究されるようにな」っていきます。その結果、空気のなかに存在する悪臭と湿気こそが「腐敗という過程の構成要素」として特定されていき、それを吸いこむことは、「内臓の腐敗と生命の原理が共存」している有機体の内部で生命の均衡を崩壊させることと見なされるにいたるのです。

こうして「死は大氣中に死体の臭いとともに」、あるいは「病気の肉体ないしは分解しつつある肉体から発散された腐った瘴気」として、漂うことになります。すなわち、腐敗した有機物から自然発生的に生じるとされる悪臭としての「瘴気 (miasma)」は、生命を解体させる死の原理ないし原因として「激しい恐怖の念をよびさま」すようになるのです。

こうして一八世紀後半、まずは目覚めたエリートたちのあいだで、生命ある物質を腐敗へと導く瘴気にたいする「A」が急速に高まり、「嗅覚的な許容限度が突然厳しくなったかのようにすべてが進行し」ていくのです。これがコルバンのいう「嗅覚革命」です。その結果として、たとえば換気が「空気の弾力性と消毒的性質を回復させる」ものとして推奨されていきます。また、ある種の芳香剤が、樟脳などとともに、「腐敗性瘴気の影響力と効果的に戦うことのできる消毒薬」としてその「B」を云々されていくのです。しかもその際、「麝香鹿の生殖器ちかくにある囊、それも腐敗性の囊からとれる麝香」のきつい動物性の香水はその腐敗性のゆえに嫌われ、黄水仙のような「生命に溢れた春の花」のほのかな香りが愛好されることになります。

そしてそれと同時に、一七六〇年から一八四〇年ごろにかけて、公衆衛生学者は「あらゆるおぞましいもののなかで最も

手ごわい敵に立ちむかう」英雄の地位にまで祭り上げられ」ることになります。その代表的なひとりが一七九四年に公衆衛生学の初代教授に任じられたあのジャン＝ノエル・アレにほかなりません。コルバンが「けしからぬ瘴気を敵にまわして、倦むことなき闘いを続けた汚水溜めのドン・キホーテ」と評した人物です。

そして一九世紀は「公衆衛生学者が〔準備した〕「清潔への賛歌」を」歌いあげる世紀となつていきます。すなわち衛生改革は、まずは都市の道路と河川といった公共的空間から、のちには労働者たちの家屋といった私的な空間からも、「瘴気が物質化したものと思われ、病原となる脅威と同一視されていた」悪臭を、たとえば下水道のような汚物処理システムにより、あるいは燻蒸（石炭の燃焼）といった化学的方法により浄化していきます。

一九世紀の衛生改革は、伝染病の原因になると信じられていた瘴気にたいするこのような恐怖（嗅覚革命）から生じていったのです。

イギリスにコレラの「青い恐怖」がはじめて侵入した一八三〇年代、それはすでに以上のような「嗅覚革命」が進行しつつあった時代だったのです。そしてコレラは、糞便や汚物が充満していた人口過密のスラム街を中心に猛威をふるう疫病として、以後数十年にわたって、伝染病の原因が腐敗した有機物から自然発生的に発する瘴気にあるとする瘴気説を実証する^⑤に^⑤の証拠として解釈されることになります。

「コレラの流行時には、樟脳を染みこませたハンカチを口に当てて出歩く人がいる」とメルヴィルが記述する光景は、したがって、「腐敗性瘴気」をコレラの原因として恐怖する一九世紀人の心理を如実に示すものだったのです。悪臭は悪臭自体のゆえに嫌悪されていたのではなく、それが致死的な伝染病の原因となると（まちがって）信じられていたがゆえに恐怖されていたのです。

（丹治愛『ドラキュラ・シンドローム』による。ただし、本文の一部と見出しを省略した）

※樟脳……クスノキから抽出される結晶で、芳香剤や防虫剤として使用される

問一 傍線部①はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1 人工的に作られた化学物質を分析する気体化学なる学問分野が登場したこと

2 都市で流行する病を研究する都市病理学がコレラ予防の議論を展開したこと

3 社会階層上層部のエリートにより構成された不安が広く知られていたこと

4 おおらかだった匂いに対する敏感さのレベルが社会的に大きく変化したこと

問二 傍線部②はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1 科学的な研究の成果として、空気中にある悪臭や湿気が人体に有害な病の媒体となることが主張され、その恐怖感が社会階層を越えて広く共有されていたこと

2 悪臭や湿気が生命力の創造や成熟を阻害するものであることが、ひとにぎりのエリートだけでなく一般大衆によっても検証され、社会全体の意識が大きく変わったこと

3 科学的な研究の成果として、空気がいくつかのガスの混合物であることが明らかにされ、生命にとって腐敗を促進する媒体であることが数多の実験で確かめられたこと

4 悪臭や湿気が腐敗の実験室であることが、選ばれたエリートだけが持つ情報ではなくなり一般大衆のものになって激しい恐怖の念が生じ、社会的に広く認知されたこと

問三 空欄

3

に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1 大衆

2 エリート

3 嗅覚

4 気体化学

問四

傍線部③はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

1 「瘴気」が原因で病気になったり死亡したりする人が都市部を中心に増加し、その原因である糞便、泥、便槽、死体などを処理する必要性が人々に理解されるようになったこと

2 悪臭が発生するメカニズムや人体への影響に学問的視点が注がれ、「瘴気」が説明原理として見出されて、広く認知が進んだ結果、悪臭を忌避する社会的感性が構成されたこと

3 コレラの感染爆発の原因が「瘴気」であることが、エリートだけでなく一般大衆にまで周知の事実となった結果、生命を解体させる死の原理に対する激しい恐怖が蔓延したこと

4 人工的な化学物質ではなく、有機物の腐敗によって自然発生的に生じる悪臭こそが「瘴気」であり、特にエリートたちを中心に、感染者に対する激しい恐怖心が共有されたこと

問五 空欄

A

B

に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

1 A 嗅覚的警戒心

B 心理学的な効果の検証

2 A 医学的関心

B 心理学的な効果の検証

3 A 嗅覚的警戒心

B 治療学的な効能

4 A 医学的関心

B 治療学的な効能

問六 傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1 臭気革命を背景に、公衆衛生学者への瘴気対策の役割としての期待が高まり、公共空間や私的空間から悪臭を除去する施策がとられるようになったこと

2 臭気革命を背景に、公衆衛生学者が主導する形で都市の公共空間や私的空間の衛生改革が実施されるが、それは公衆衛生学者の長年の悲願であったこと

3 公衆衛生学者は、清潔こそが正義であるという考え方を、臭気革命が起こった際に積極的に広めていたが、ようやく実際の施策として実施に至ったこと

4 公衆衛生学者は、都市における感染症の感染爆発を事前に予想しており、空間や身体を化学的に浄化する必要性を一般大衆にわかりやすく説明したこと

問七 傍線部⑤はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 コレラの原因は腐敗した有機物から自然発生的に発する悪臭、すなわち、瘴気にあるという説が、この時代に起こった感染爆発によって実証され、現代でも有効とされていること
- 2 コレラが糞便や汚物などの悪臭の元を除去することで治癒することがわかり、その現象を根拠として、スラム街の道路や河川、家屋を浄化する衛生改革が進展しやすくなったこと
- 3 コレラの原因は腐敗した有機物から発生する「腐敗性瘴気」であると解釈され、対抗策として樟脳を染みこませたハンカチを口に当てるといった感染対策の有効性が実証されたこと
- 4 コレラが糞便や汚物などの悪臭のする場所で流行し、それまでに進展してきた嗅覚革命と相まって、コレラの原因が瘴気であるという解釈が信じられやすい状況になったこと

問八 本文の趣旨と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 悪臭は、その匂いの源に人間の身体を腐敗させる可能性のある物体が存在することを示唆する指標的存在であると考えられ、嗅覚革命によって人々の意識改革が起こった。その後、都市部から悪臭の原因を除去する衛生改革が功を奏して、有効なコレラ対策が実施できた

2 悪臭は、気体化学の研究成果として腐敗性瘴気と名付けられ、コレラの原因となる化学物質であるとされた。嗅覚によってその毒性を素早く検知できることが判明し、感染症対策として有効な施策が都市で実施され、エリートのみならず一般大衆にもその恩恵が広がった

3 文学作品の記述には、書かれた時代の科学的知見が含まれる。『白鯨』に見られる「樟脳を染みこませたハンカチ」がコレラを防ぐ描写は、コルバンが『にのいの歴史』で提唱した「嗅覚革命」および「衛生改革」によるものであり、現代科学の水準からは滑稽にも見える

4 文学作品の記述には、その時代を生きた人々の生活が描かれる。その描写の原因を丹念に探っていくと、人々の意識の変化、科学的知見の変容、それらをふまえた都市計画や人々の行動変容などが背景にあることがわかり、描写された行動の意味を解釈することができる

(以下 余白)